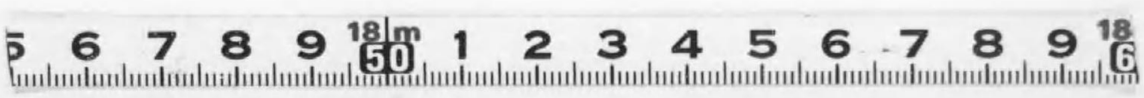
特115
894



F3115
894

帝國圖書館藏

小澤氣樂堂主人著

株式期米測定秘法 寶泉錄

寶産社

大正
15. 6. 5
内交

序

近代科學的思潮とは、經濟界の著しき發展に依つて生ずる競走は一般商取引の激烈なる対象は瀕繁に現はるゝ物質的へに優勝劣敗の現象は更に激烈ならむ。

代科學の進展と共に更に激烈ならむ。

引き動かされて人類は投機心益々勃興し一般の商取引の結果は当然の帰結なり。

と式の機械的法則に支配せられ、二拾有余年著者は此の点に留意せられ、二拾有余年著者は此の点に留意せられ、株式の蘊蓄を傾け一巻となし、株式相場の発達研究に勢力を傾け、之を名づく。其内容に於ける前期の著者の研究は、何等の苦心を要せず的確なる識見に感激し、茲に一書を呈する。

大正十五年四月三日

商學士　都野　豊

自序

茲に相場の女神あり。是に小波瀾大波瀾の裝飾を施す。迷ひの心得なき女僧の念生じ、世人其裝飾の善悪を論じ、醜美に徹する神何ぞを知り得ず。心の動揺を来たし、遂に絶望の淵に沈みゆくもの寡し。こゝに皮相なる、所謂市場の辯饒舌に浮動し、或は材料觀に捉はるゝ信念定まらざるものを多く、道にして、誠に遺憾の至なり。

蓋し相場を觀ずる者は、其心すべからく明鏡の如くなら

ざるべからず。

此処に於て余は永年熱血を注ぎ実戰研究の結果相場循環性と前途の軸の創見とによりて構法せる測定法を提ゆる実戰の利用に依り、その高下変化天底の大機を捉ゆる実戰の秘法、成功致富の信條を闡明し　株式期米測定

秘法宝泉録の稿を起し　蕪辞をもゐへりみず公にする
次第なり。
比の「宝泉録」は世に数多く出てゐる粗笨の法則にあらずして、これを会得せば必ずや相場の眞髄に徹するが故に、連戰連勝の栄冠をになふであらう事を確信す。
この拙稿によりて、世の同志を尊き光明を与へ得ば、
余の先栄のみにあらず。

大正十五年四月三日稿

小沢氣樂堂主人識

目次

緒言……五
第壹章　秘法の威力と信念……七
第貳章　三猿の秘密と信念勇気……八
第參章　高値賣　安値買……一〇
第四章　天井賣底値買　人気定取採算……一一
第五章　仕掛法……一三
第六章　逆指値の応用……一四
第七章　利喰手仕舞……一四
第八章　値巾……一五
第九章　短期大利法……一六
第十章　罫線　足取……一八
第十一章　半値作用秘法図解十種……二〇
第十二章　天井底の確認……二八

第十三章　保合及分岐の対策……二九
第十四章　天井と底……三〇
第十五章　新東長期及短期の足取……三三
第十六章　中眞測定法……三五
第十七章　順還と天底……三五
第十八章　大局足……三七
第十九章　測定の法式記号……三八
第廿章　高安指定値算出法……三九
第廿一章　大中天底目標算出法……三九
第廿二章　中眞指定点測定法……四〇
第廿三章　中眞指定値測定法……四一
第廿四章　東株期米一順還測定図
（附）押目買と戻賣図解……四一
秘傳　心得……四五
第廿五章　古歌十五首……五三
第廿六章　景気順還表……五五
第廿七章　東株創立以来年次高低表……五七
第廿八章　投資の研究……六一
第廿九章　利殖の方法……六三
第卅章　投資の秘訣……六五

緒言

世の進歩に従ひ社会の事物進展し大競走起り大戦争起り、人間の絶大の精力を發揮して偉大なる活動となる。皆是利己的慾性の投機と言ふ外なく、又産業界を發展なさしむべき基礎なり。世の中に投機なくば実に人間の機能は消磨衰退し仕舞なり。故に世の進運と共に利己的慾性の投機心横溢して、相俟つて群集心理の大活動となり、経済界の盛衰順還と相場起り、其旺進の極は一轉して大反動となり恐慌より沈衰の極に順還し、成金も摧花一朝の夢と化する者多く、幾多の事業も大整理をなし、更に又昇進の気運に向ふ等其波瀾は世の進歩につれ倍々拡大急劇となるなり。

今や経済界は世界共通となり、古人の金言たる金泉

録や六甲傳も経済學者の高遠の學理學説や統計も相場に先んぜり孔商機を捉ふる事出来難し。実に六〇敷は相場の前途達觀なり。

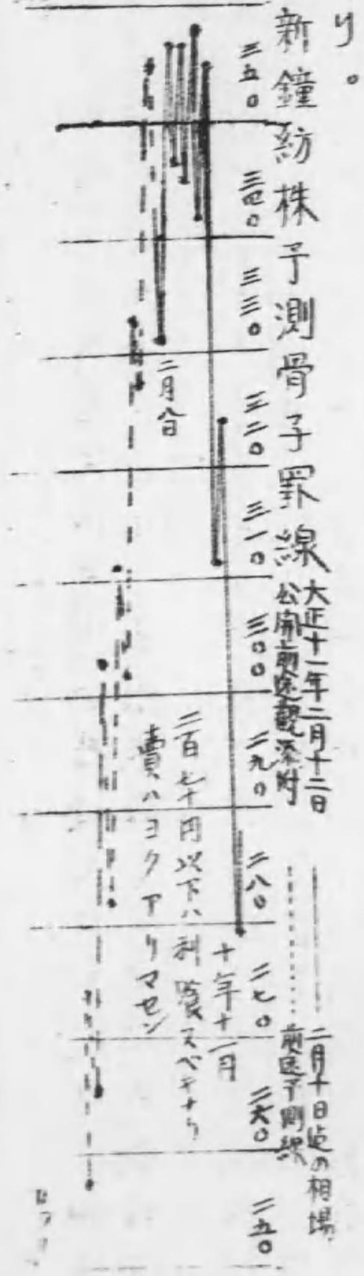
経済界の盛衰の先駆をなす株式相場にて、東株大株其他の人気株を我法に依りて測定し前途を考慮せば其起伏盛衰の期を知り又事業の整理縮少拡張等の機会を捉へ得べし。

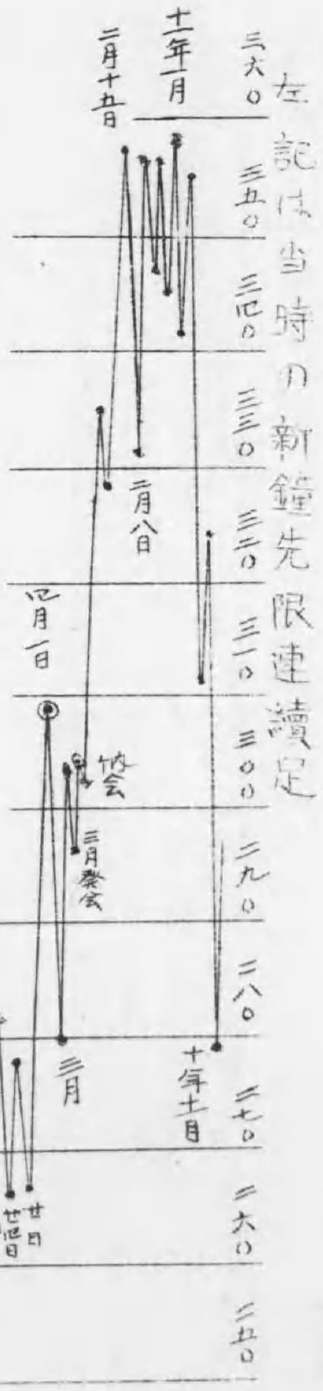
第一章　秘法の威力と信念

秘法の威力と信念とに依り前途を達觀し得る実例。

大正拾壱年大坂の石井氏が新鐘紡株に猛烈なる買占をなし、東西の市場を脅威せしめたり。此時に当り余は二月九日附中外商業新報に新鐘前途觀無料進呈と広告せし処、申込者殺倒し来たれるにより秘法の信念に立脚して左の予測骨子罫線を添記せる前途觀を作り十二日発送せり。これ実に何人も企図出来ぬ秘法の威力なり。

◎新鐘紡株予測骨子罫線　大正十一年二月十二日公開前途觀添附





右の如く約百圓中反落が三ヶ月に渡り的確に実現せり此の秘法を購讀する諸氏の中には、当時前途觀を申述み其実現に驚異せし方の多くある事と信ずる。

第二章　三猿の秘密と信念勇氣

みざる、いはざる、きかざるを三猿の秘密と云ふ。

強弱の変を見聞するとも敢て人に語る勿れ。語れば自己も迷ひ又は迷はされ人の心を迷す例多し。要するに法の眞理信念一心に徹底して、天井底の確心を得ば敢て人に語りて賛成を得むとせず、又自己の明を誇らんとするに及ばず。人に語り人の意見を問はんとするは信念定まらざるなり。然る場合は尚冷静に秘法の指定を研究調査し、信念を確立せらるべし。人に語りし為信念の確立を破られ迷ひを起し勇氣を損じ遂に眞の商機を失ひ不利益なる機先にて出動するに至る例多し。

故に我法の測定を研究して信念の確立を謀り、資金を三段に割て勇気を損ぜざらしめ、法の活用に依り前途高下変化の測定を怠らず、注視して法の指定により千変万化の波瀾に対して進退駐引に囚転滑脱、水の流るゝ如くせらるべし。

第三章　高値賣　安値買

相場に余り経験なき人は、相場は高値を賣り安値を買へば儲かるべきなりと言へり。是は極めて要領を得た眞理なれども、其高値安値が一定しおるものにあらざる故價位の高安を定め難し。

陽陰の二首

万人が万人なれば弱気なら上るべき理を含む米なり万人が万人なれば強気なら下るべき理を含む米なり

右は陽陰変化の二首にて尤も味ふべき金言なり。然れ共此の二首に依りても万人の強弱の断定に苦しむ事恰も高値賣安値買と同一にて眞理は眞理なれども万人の強弱の標準、自己の觀察の当否に迷はざるを得ず。

是を我法に適用せば相場が天井済の反落により中眞点を創り安値を辿り法定の指定安値を実現せんとする場合は市人弱く、辛棒し来りし買方も投げ退くに至るべし。是等を万人弱き時又は安値買の時と知るべし。是に反する場合を以て万人強き高値賣の時とべ得るべし。

第四章　天井賣底値買　人氣足取採算

完全なる測定に依り天井の確定を得し時は信念を固め、如何に買人氣猛烈なるとも天井賣を敢行せらるべし。常に人気の消長足取採算に注意すべきなれ共、秘法にて前途を測定する故、大なる注意を払ふ必要を認めず。只天井指定価に達せんとする場合に於て、暴騰し大商買あり時は日日増加し来りし取組高も減少するに至る又、或は増加せざるに至る。而して相場は其大商買にて一段落となり下落の歩調を辿るべし。

依て右様の場合は指定値に多少の不足するとも踏と利
益にて大商買となりしもの故、踏物出遣し一段落となり、高値不足にて転換をなすを以て、買玉の利喰其他
の勉引に注意すべきなり。右は天井には少く小天井に
は能く有る例なり。

底値を辿り行く場合は売角人気弱く商業活発ならず
従て取組も日日に減少し行くべき筈にて底値指定値
に達せんとする時は因果玉の整理解合等に依り、取組
高を著しく減少して急反撥を来すべきを以て安値指定
値に接近せし時は、利抜と底入買取行とを怠るべから
ず。又相場底入して急反撥をなすを受に下押して底調
べをなすべく所謂底値百日と云ふ保合をなし、何等か
材料を入れ突然大商買あり。反撥の気勢を示せし時は
是を動機に保合を分岐し大暴騰の一歩に入るべし。右
の場合は売角小相場に慣れ居る故押目を買はんとし買

遅れるに至るを以て、高値に飛付く如き気分起るも必
ず成行買の一弾を放つべきなり。

第五章　仕掛法

市場へ接近する者は此法だけでも
機敏に勉引せば儲けられる。
相場が荒れると仕掛に迷び機を逸する事多きを以て
自己の信ずる方針を実行せんとする場合は又は次の寄
付如何と人も我も気を揉む様の寄付に注意して、其寄
付競値の上下値段を記憶して　自己の方針に従む寄付
にて仕掛けるなり。而して方針に反する相場になれば
損害なる故、其損害を少なからしむる為に、競値の上
下多方針に反する方に買戻し又は賣埋の逆差値する
なり。これ安金なる策戦なり。

第六章　逆指値の應用

仮令ば寄付の競値一円より三円あつて二円に寄付き
し時の如き　一円買より三円迄を競値巾とす。相場は
此値巾を抜きし方に行くものと定め、自己々賣気なれ
ば寄付にて賣り　同時に三円十戔買埋め逆指値をなす
べし。買気なれば買ひ同時に〇九十戔賣埋めの逆指値
をなすべし。

逆指値は仕掛利喰変化の要所　追擊の要所又は激変
に対する安全策に応用すべし。

注意
逆指値の注文は逆指値と記入すべし。

第七章　利喰　手仕舞法

(一)利喰や利乗せする場合にその値數々判然せざる時は

次の寄付を見て前法により逆指値して心を落付け、尚
利乗りせば値巾等も考へ見込を付けて利抜々るべし。
又左に示す半値作用を考へ半値剛際に突掛けし時は一
旦利喰すべし。

(二)短期は長期と異なり、綾弓き故相当の値巾あらば時
時利喰して綾をみて出直す等の駆引に使なり。
(三)短期は小巾往来多く利喰仕掛々自由なる故、人気や
気配に従つて安値や高値を追擊するは慎しみ、戻や押
を待つて半値法に依り、仕掛利喰の駆引をなすべし。

第八章　値巾

高下値巾は長期証據金の約一數。約半數を大体の心
得とし、前の値巾及相場の癖を考ふべし　々、る場合は小
大暴騰大暴落の相場は稀であるゞ

綾を掴ふ気になるは悪しき故、平気で相場に従ふべし
足取、採算、人気の消長、反動、天底、値中等は恒に考慮して仕
掛利喰の馳引をなすべし。

第九章　短期大利法

〇実戦収得の秘訣〇

本法は半値作用を應用するを主眼とす。
左に罫線にて変化応用を明示せる如く、半値は騰落
の変化を率とする故、短期の馳引としては常に是に注意
して考ふる時は自然完全なる方策方針が定まり、相場
の高下が判明し来り、利喰々々の連戦連勝を博するに
至る。

〔一〕短期は往来波瀾が多き故、半値作用の応用の要所
示現多く、仕掛利喰途転の要所を捉ふるに自由で便利

なり。

〔二〕半値作用を会得して実行せば小中の相場でも大中
の相場でも自由に馳引が出来て、何回でも完全に収利
し得らる。

〔三〕半値の牽制作用を一見明瞭ならしむる為、罫線十
種に変化を明示す。此法に依れば要所々々が次々次
へと判明し来る故に、熱心に研究会得し、信念を固め
機を捉へ変に応じ大収利すべし。〔既往の相場と対照し
て研究するが上策なり。〕

〔四〕此法を会得せば、長期に大方針の不動玉を建て短
期にて要所々々に安全収利の馳引をなし得る利得あり

〇勿憚改禍　機敏の利〇

〔一〕短期は長期とは異なり、往来多き故軽快に馳引す
る事を要す。

〔二〕誤った仕掛をなしたる時は、直ちに手仕舞すべし。

〔三〕法として無理を通す気になる勿れ。無理は大損の基。

〔三〕又は迷ひを生じ方針定まらざる時は変化の要所に指値逆指値をなし更に半値法を考慮して的確不動の法策を樹つべし。

〔四〕本法に依れば仕掛利喰の機会は続々判明し来る故建玉を惜まず、利喰に心掛け、軽妙に馳引して要所に仕掛利喰途転を実行せらるべし。

以下各章にて此法を詳細に説明せむ。

第十章　罫線　足取

相場の高下や半値を一目瞭然たらしむる為には一円足及半日足を作るべし。

◎半日足

前場
後場

寄付高値
安値引
大引
寄付
陰引
陽引

○……前場寄付
一……後場寄付
∨……寄付より高引
∧……寄付より安引

◎一円足

一円以上の高下を連続して引く事左の如し

本日と明日との足は一行向をあけるべし

夜放れは……又は赤にて引くべし。右の図は底形にて夜放れして半値以上へ寄付きし形。

△……は半値の印。

△……赤又は青にて印すべし。

第拾壱章　半値作用秘法圖解拾種

半値とは一区劃の相場の高値と安値との中値なり。大圖中圖小圖即ち大中中中水中共半値に注意し、順序を追ひ、僅かの三五円中の半値にも注意して相場の高下を考ふるべし。然る時は自然に前途を予測せらるものなり。

第一則

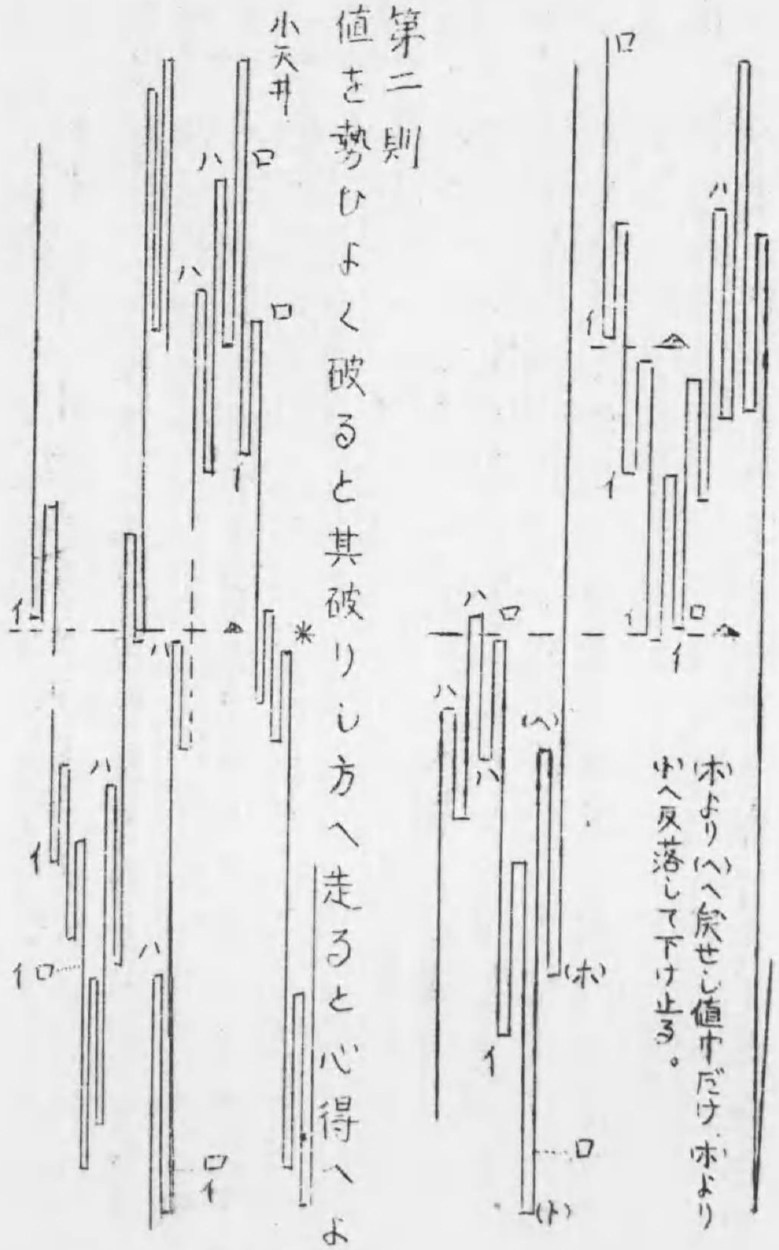
半値は騰落の変化、分岐を宰どり天底をなす。

一、半値は反撥作用を起すものと心得る事。

二、上下共半値掛に押寄せし時は半値にて一旦止ると思ひ、利喰したり相場に向つて仕掛、逆指値等の馳引をなすべし。

〔図解参照〕

(イ)……買。(ロ)……利喰。(ハ)……賣。〃以下是に例ふ〃



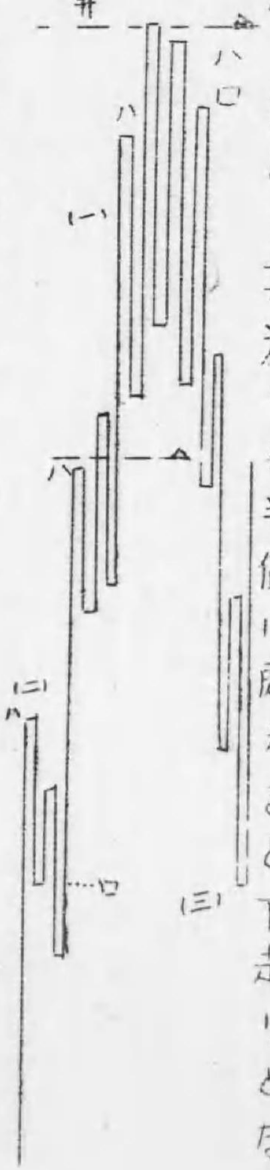
第二則

半値を勢ひよく破ると其破りし方へ走ると心得へよ。

米は高下一段落近きを示現す。

第三則

高値に往来して反落し勢よく半値を一二円切りて小綾の戻りを成し其戻り必半値に閊えると下走りとなる。



(一)の値中は(一)の値中位と見て利拔く。

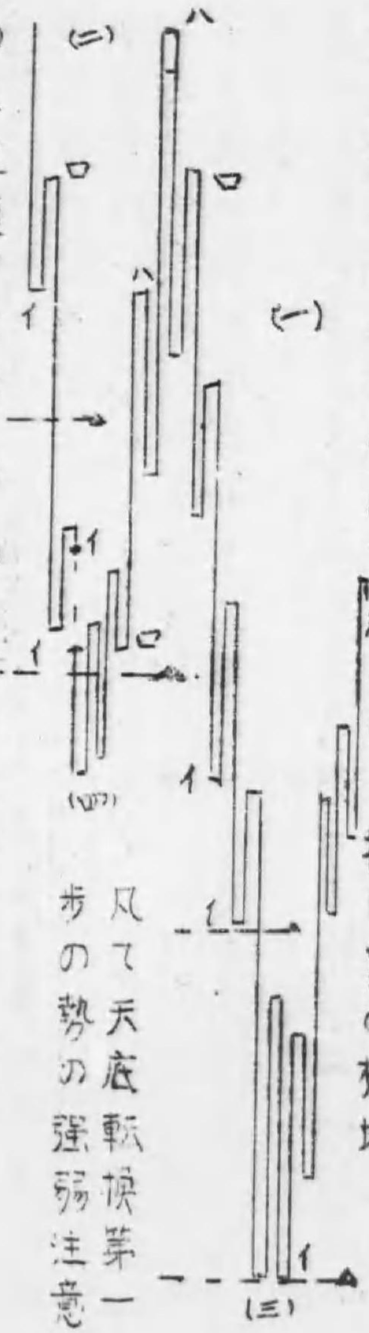
(二)の安値を拔くと一先づ小戻りす。

(三)右の図は中圖半値に頭を座せられた戻賣の相場

第四則

反落して遂に半値を一二円下拔きて小堅く保合む半値以上に噴出して引けると下値は半値迄と心得押目買。

図は下値を中圖半値にて底入せし押目買の相場。



(一)の上進値中は殆んど(一)の値中に均と見るべし。

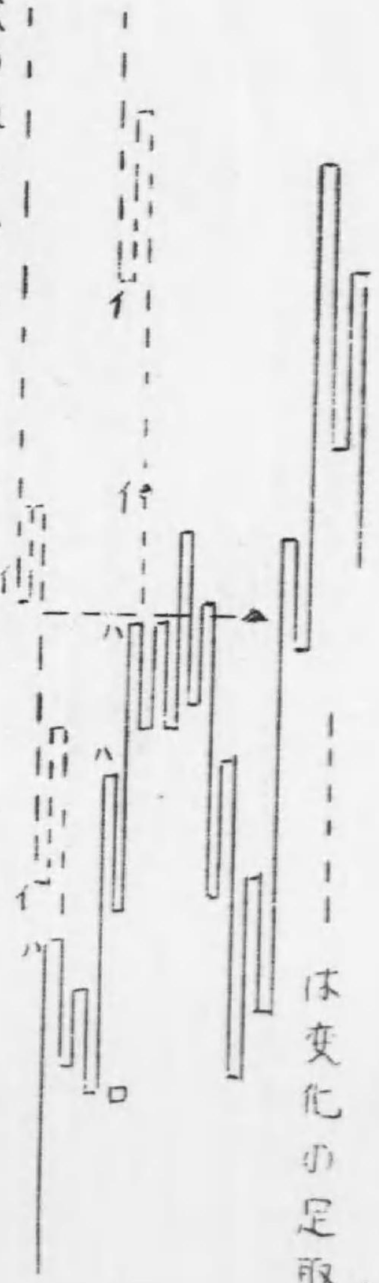
(二)(三)(四)の押目中殆ど均し。

十五年二月新東短期保合放れ上進の歩調と参照せよ。

凡て天底転換第一歩の勢の強弱注意

第五則

戻りの勢ひで少し半値を上拔きても直ちに半値以下に落ちて引ける又、半値必頭に閊え往来する時は上値は半値迄と心得、戻賣方針にて進むべし。



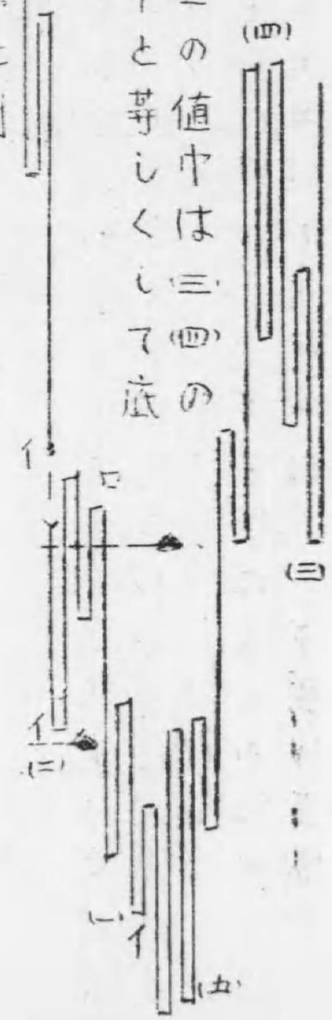
……は変化の足取。

戻の勢ひが意外に強き時は……の如く変化する恐れある故注意すべし。

第六則

半値以上に好勢に引けると尚高値に進む出直り相場となるを以て能く注意して押目買に心掛けるべし。

(一)は底造り足。小引みに小半値押しして底固めに進し一旦半値に悩みに小半値に殺止めたが正式なる故忽ち上放れ半値の牽制を離脱し暴騰する図。

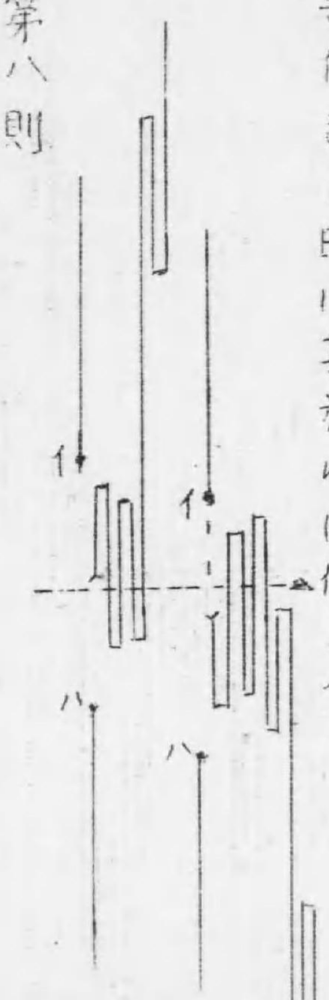


(三)(四)(五)の値中は(三)(四)の値中と等しくして底

第七則

半値にゑらんで悩み揉をなした相場が翌朝其揉を放れて寄付きし時は其放れに付くべし。

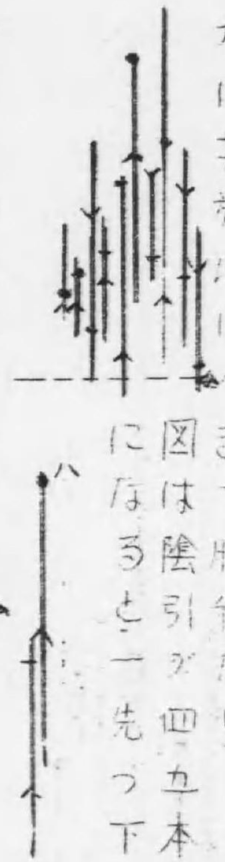
第八則



半値の牽制を脱するには多く疲放である故、相場が半値に久らんだ時は、翌朝の寄付に注意すべし。

第九則

半値間際に喰止め一時保合て居り、翌朝勢よく半値を飛越し放れて寄付くと其放れも方に突進す。故に十中八九は其放れにつきて勝利なり。



図は陰引が四五本続き殊に短き足になると一先づ下げ止る形勢を示す。

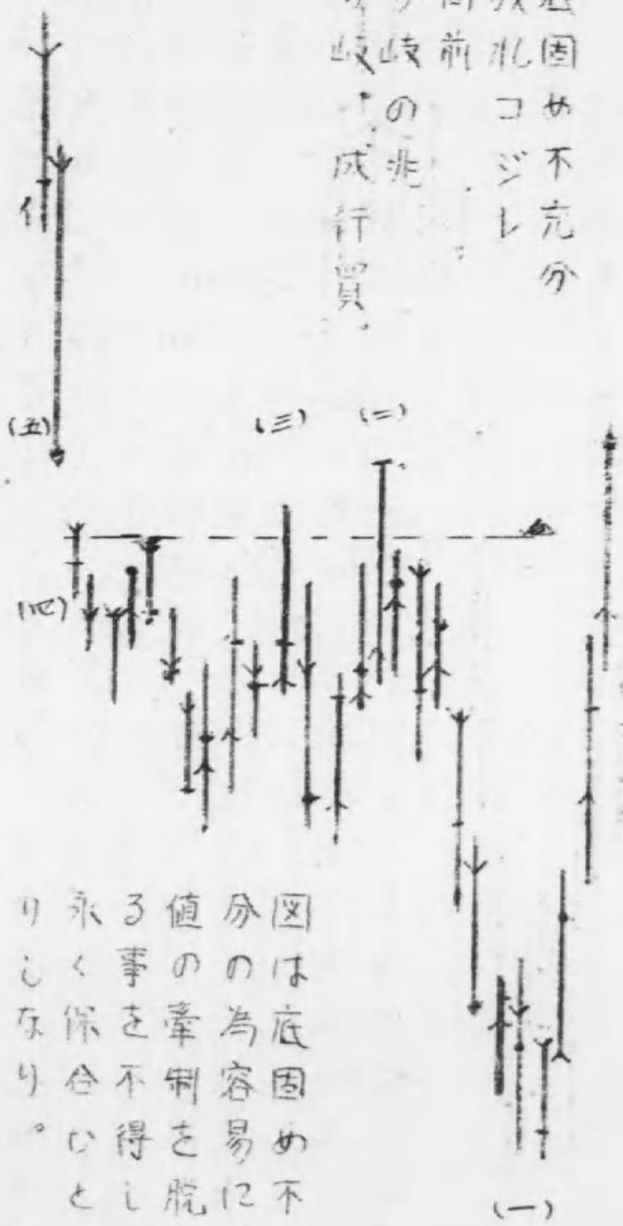
(一)は青箭しの効なく反撥の動機を生ぜし形勢

(八)は追撃。イは買。

第十則

半値に喰止め一時保合て居り翌朝半値を越して寄付きても其気勢鈍く、又半値内に戻り引ける時は機なほ熟さず保合ふものなり。此の場合は注意して分岐の機を捉ふべし。

(一)底固め不充分
(二)放れコジレ
(三)同前
(四)分岐の兆
(五)分岐。成行買。



図は底固め不充分の為容易に半値の牽制を脱する事を不得して永く保合ひとなりし。

第拾貳章　天井底の確認

恒に天井底の確認を誤らぬ様に注意して方針を決すべき第一なり。天井底の確定を得て前途を予測する時は、自然半値作用変化が明白になり完全の駄引をなすものなり。半値の牽制で飽止めても一時的と見做し天井又は底の確定した方針に従つて押目又は戻りを狙つて仕掛けて行かねばならぬ。然らざれば半値の牽制を脱する時の大放れを取不足するなり。是は当分の天底を付けた一区劃の相場の半値に対する策なり。

第拾参章　保合及分岐の対策

保合

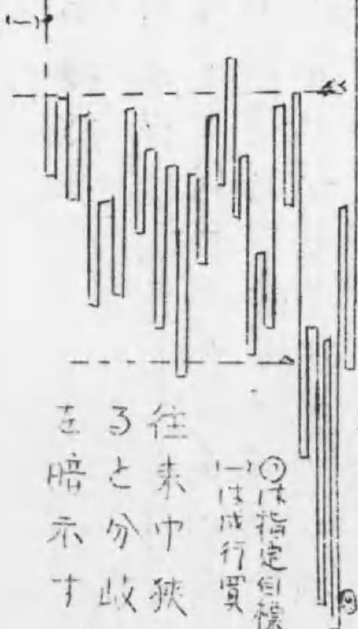
上下共半値に挾まれ其間を往来するを保合相場と言ふ。

(一)此の場合少しは半値外に出るとも半値即ち保合圏内に戻りて引け保合かもの なり。〔右に図を示せり〕

(二)而して往来中が扶くなるなる一日の動き巾が少なくなると保合分岐の兆なり。此時は分岐を掬ふ対策として放れに就く逆指値をなすべし。〔保合長き時は分岐の値巾広し〕

(三)上騰下落の途中の保合は日数少なし。此場合は寸く相場に従つて分岐するものなり。(二)の馳引考慮せよ

分岐



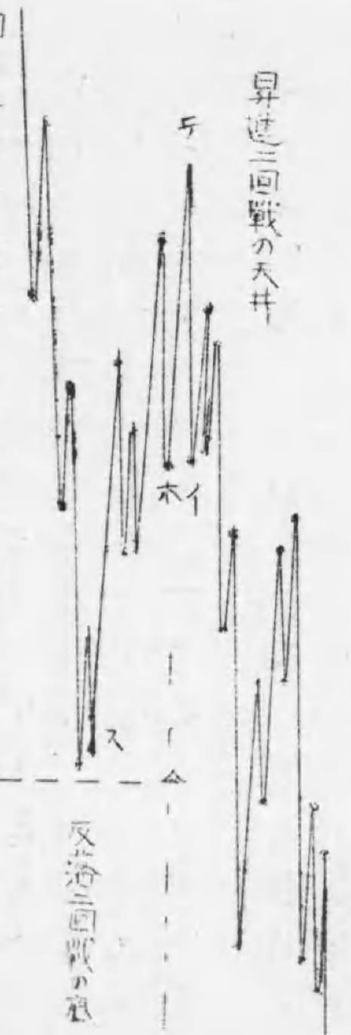
往来中狭くなると分岐迫るを暗示す。

分岐は突発材料か前日の気を受け半値外に放れ寄付分岐する也。寄付と引けと同値の時、半値押に引け時等分岐の兆也。

第拾四章　天井と底

底値買敢行と天井賣敢行、

大底は底値圏内にて數年保合ふのであるが中間の底はたの如く二回の反落で底入するが通例なり。左図は大中昇進二回戰の天井、反落二回戰の底なり。



(一)是は中間の天井底の図なり。けの押を入れ買人気旺盛となり万人新高値に安心買をなす有様にて猛烈の勢で爆進し忽然として半値を切つて暴落し其意外に驚く場面を呈せし時は天井打なり。去る大正十五年二月二十三日の相場の如き其実例なり。

(二)反落二回戰の底入の場合は、大勢高きを高唱して買つて居るも相場は案外上進せざるを焦慮する折柄、意外の悪材料突発に驚き投げ崩れとなり底入するものなり。

(三)而して以後は悪材料発表を買ふ相場となる故深押なく好材料発表に利喰買増しする相場となつて昇進するなり。

(四)故に此の第二回反落の底買を断行せざると成功の好機を失する事となるを以て一日投崩れにて暴落しぬに接近せし時は如何に人気弱くとも、其人気を買向ふべく直ちに成行買の一弾を放つべし。自己の見込の値数に達せずとも十円や十五円中引戻る覚悟にて決心せ

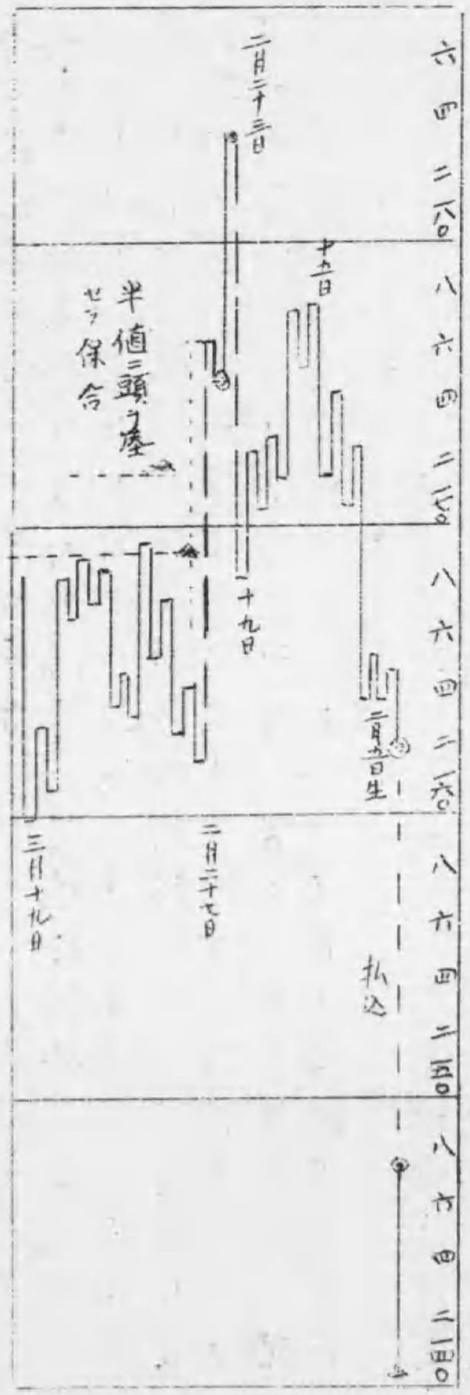
ぬと此底買を敢行出来ぬ事多し。

大天井打の場合は買人気旺盛にて熱狂暴騰し夜放れに二三十円中も上放れする事もあるので安値より買つて儲けて行く人ぬ者は危険を感じて賣向ふ事出来ずたし。大天井は中間天井で説明した如く、ゆげの半値を切つて反落し其意外に驚く場面を呈せば、相場の昇進力は挫折せられたものにて昇進相場の終末を告げたものと断ずるもよし。

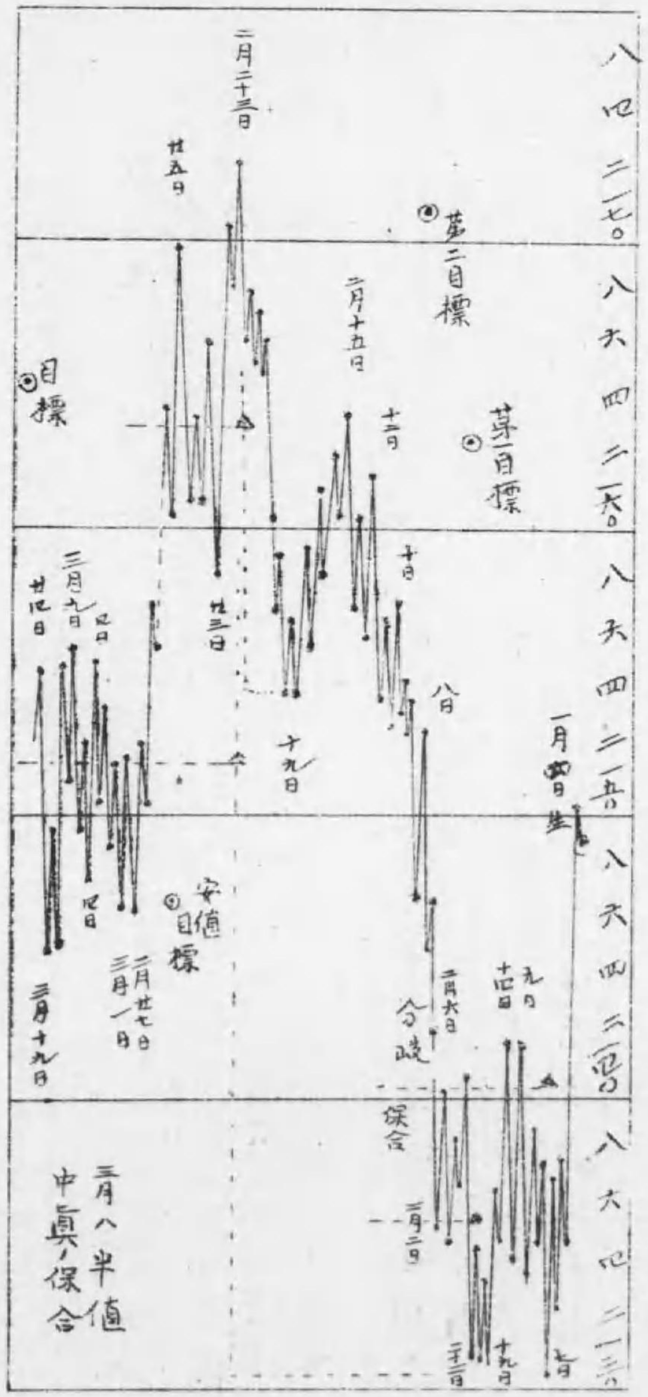
然れども市人は熱狂し居る故其反落を高値覚えて買捲り、賣方の利喰又は踏物続出し万人買人気にて賣買出来高は未曾有の大商内にて以上の新高値に急激に爆進し、買方は万丈の気焔を吐く有様の白熱的光景を呈して大天井打となるなり。依而ゆより急激に爆発しその高値を上抜くは大天井指定点へ突進する最後の光であるを以て、その高値以上に爆発した吹値を賣向ひ大天井賣を敢行し最後の勝利を博するなり。

第拾五章　長期新東

拾五年二月天井及三月の保合



新東京期　拾五年到三月足取



第拾六章　中眞測定法

相場は順還性を有す。故に相場の眞髓を極めむとせば此の中軸に據らざるべからず。わが中眞測定法は此の点に立脚せる根本的法則なり。而して中眞測定法と半値作用法とは予測上に於ける車の両輪の如し。此の二者に依りて高下変化を捉ふるを原則とす。

騰落共前途の測定には中眞点測定法中眞指定値測定法と大中小圏の半値作用（第拾壱章参照）と相俟つて測定し確なる方針を樹立第応せば巨利を博し得らるる。以下各章により測定法及実例を挙げ一目瞭然たらしむ。

第拾七章　順還と天底　第十四章参照

(一)昇進相場即ち押目買の相場は半値又は中真点分岐点を辿り小順還押を繰返しつゝ上進するを以て中間の目標にて時々利喰押目を買付け又は利乗せ等の馳引は実行し易し。而して天井指定圏に躍進せし時は恐れず天井売を敢行し(第四章参照)大転換の機を捉ふべし。

(二)天井打の戻売相場は中真点分岐点及半値又は小半値に小順還して戻の頭を付け反落を繰返し或底値に迄る。故に第一反落の安値目標実現迄は戻売方針一貫して実現と同時に途転買越し反動綾を取るべし。其綾を取る場合は七分の利にて途転売越し更に吹値売方針を取るべし。然る時は大中第二反落の戻天井売を敢行し得て更に大底値を利喰千人力の勢を以て途転買越し大桝を捉ふに至るべし。(第四章参照)

(三)大底入は数年前の大底値、又は其底値圏の分岐点へ順還して大底入となる。期米の如きは時勢の進運に従ひ價位高くなるを以て一順還毎に底値を切り上げ行くものなり。

(イ)底入は底値指定値を実現し、意外の急騰をなして転換の気運を表現す。此場合も

(ロ)而して約半値押をなして底固めをなす。

(ハ)兎角人気弱し。

(ハ)底値圏内を脱出する時は猛烈の勢に踏物簇出し意外の大中奇騰をなして第一中真値を作る。

第拾八章　大局足

初心者には一円足が尤も適当であるが一円足は小中の測定用なるを以て大局を達観するに必要なる大局足を要す。大局足は一目明瞭ならしむる為に余分の綾

を捨却し、中眞絞分岐点芽凡て測定上必要点は落ちなく作制すべし。

第拾九章　測定の法式記号

(キ)——は中眞値
(ラ)——は前の変化を起せし高値
安値又は分岐点
(ク)——は高値又は安値指定目標

第貳拾章　高安指定値算出法

一、中眞値(キ)を倍し分岐点又は高値(ラ)を減じたる残高が安値指定値(ク)なり。
(丹櫛齣(キ)＋丹櫛齣(キ))－分岐点又は高値(ラ)＝安値指定値(ク)

二、中眞値(キ)を二倍し分岐点又は安値(ラ)を減じたる残高が高値指定値(ク)なり。
(丹櫛齣(キ)＋丹櫛齣(キ))－分岐点又は安値(ラ)＝高値指定値(ク)

第廿壱章　大中天底目標算出法

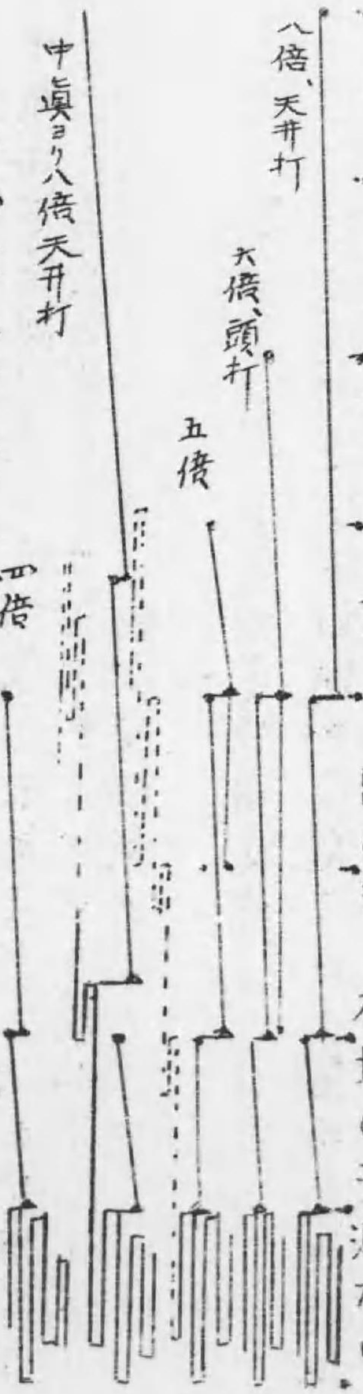
一、或中眞点又は天井を中眞(キ)とし是を二倍し先の底分岐点(ラ)を減ぜし残数が大中の天井目標(ク)なり。

二、或中眞点又は或中の底値又は分岐点を中眞点(キ)として是を二倍し先の天井又は分岐点(ラ)を減じた残数を

底値目標(ク)とす。

第廿貳章　中真指定点測定法

中真指定点測定法は大中の測定に用ふるもので天井底中間の小天底の一区劃より離れ行く相場の予測なり。



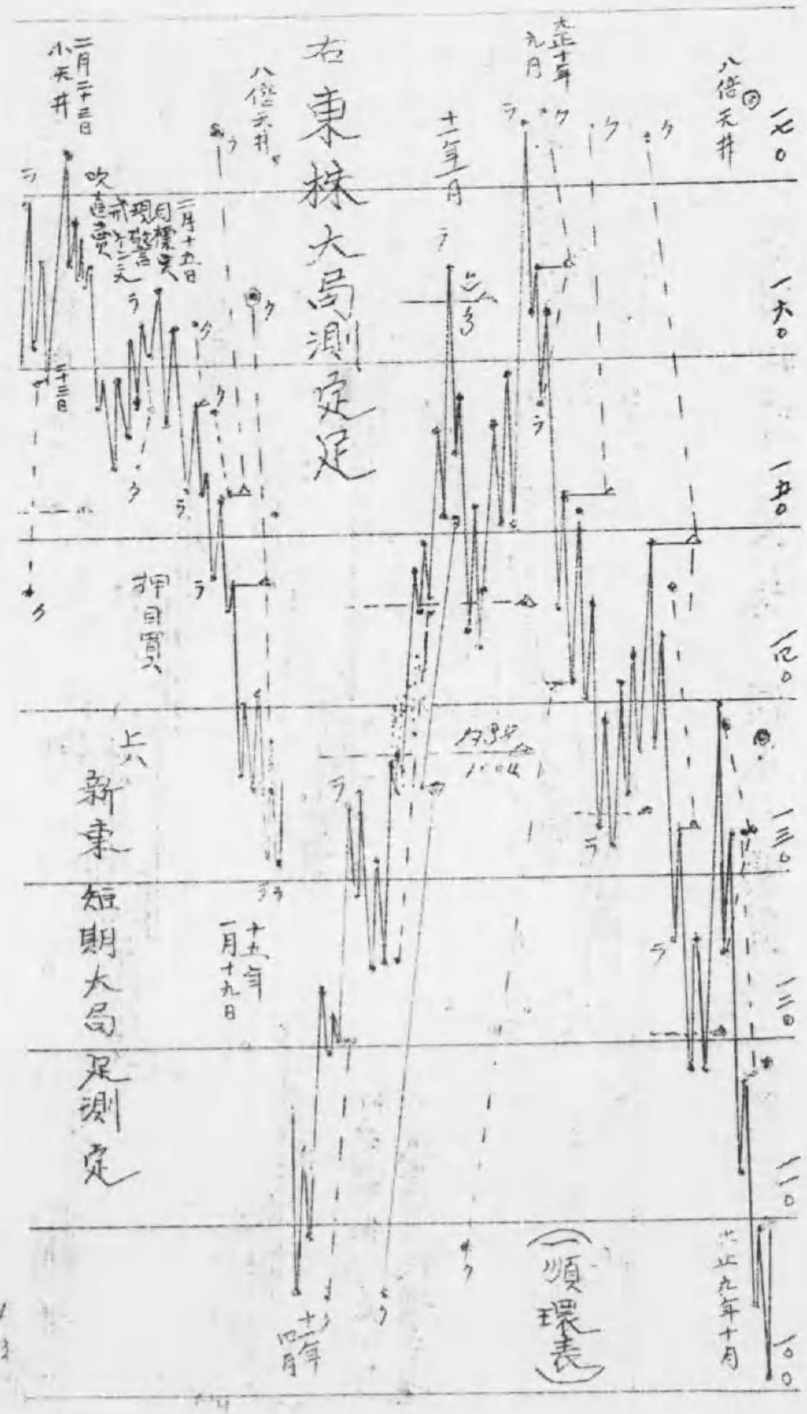
下げは此の反対の測定なり。

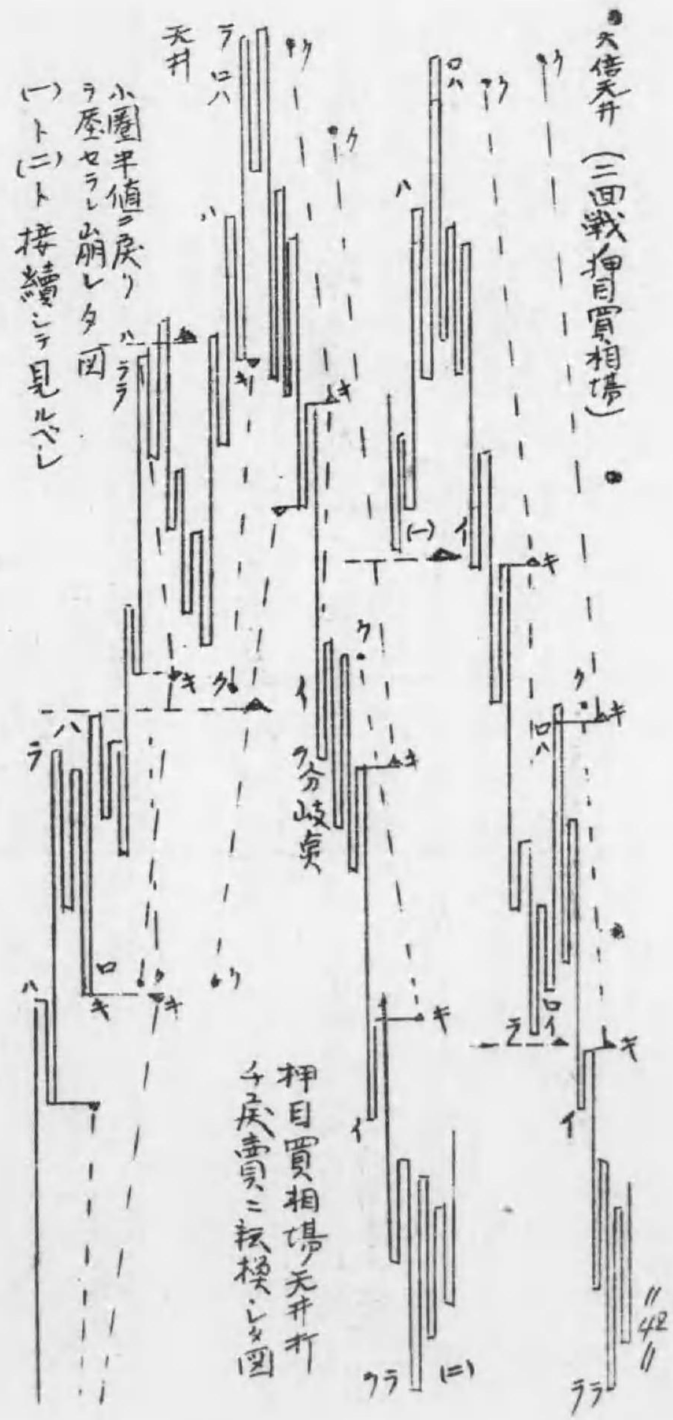
右測定は予備的の測定にて其算出値は一の暗示なり。

相場は活物なるを以て必ずしも一定の型に嵌るものに非ず。依て相場の進行に従ひ中真値、分岐点等を発見し中真指定値測定法に依り前記中真点測定法と対照せば殆ど一致点を発見すべし。かくの如く順次測定し天底測定の指定値を尋ねて的確の勝算を得らるべし。

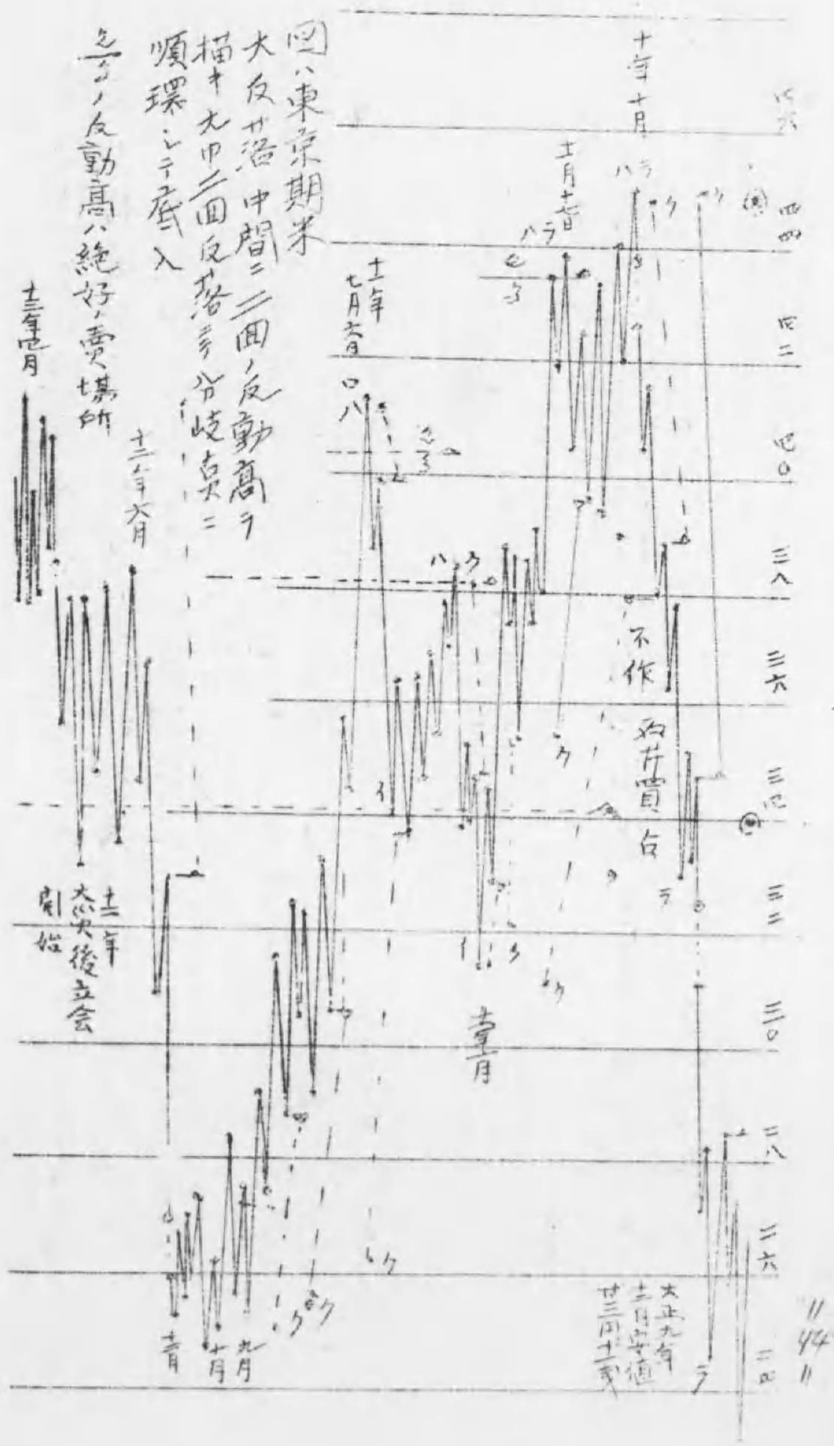
第廿参章　中真指定値測定法

中真指定値測定法は相場の指定する中真指定値に依り前途の指定値目標を順次測定する法にて大中も小中も此測定に依り高安目標を算出し大中小の天底値を断定し連戦連勝を博する神威的の法則なり。第十一章第廿二章の秘法を併用して測定す。左図に方法を示せし如く中真値及分岐点に注目し半値作用を加味して以て高下変化転換の機を提ふべし。左に図解で示す。





第廿四章　東株　興米一順還測定図


十年十月
十年十月十日
十年七月十日
十年六月
十年十月
十年六月
十年十月
十年六月
十年十月

引續き商内利運に仕當てる時は、利は八分目にて取る事肝要なり。勝に誇り段々大利を望む事に気移り慾に迷ふ時は結局大損するものなり。又急に大いに儲けんと焦慮し僅の高下にても上下の利を取らんと思ひ、相場に焦り進んで商内する時は却つて損失す。是皆慾ト相り出る迷いにて世に此例多し　深く慎しむべし。

◎九分の勝利

数月の思惑後是ハ九分通り仕当たる時は必ず一旦手仕舞ひて休むべし。要は利を無難に取留むる事が真一。

◎休むが肝要の時

高下の見定め付ひず悪ければ買ふべし、良ければ買ふべしと高天秤に思ひを馳せて市場に望むは宜しからず。又見込違ひの時は早速手仕舞して一先づ休み　秘法を能く考究の上方針の確立を謀り、初めて手を下すべし。

◎活気ある相場

庇にて保合、自然と起き上りて活気ある相場は油断なく買に入るべし。必ず暴騰すべし。

◎上げ詰めの相場

天井近き時は人気揃ふて強く又買方は益々気勢に乗じ買煽る故此処に始めて天井打ちとなるものなり。能く〳〵味ふべし。

気配に連れ今買つても明日は必ず利分ありと見定むるとも新規に買ひ増すべからず、只に買玉の利益に心掛けるべし。燈火の将に滅せんとする時一時パット最後の光を発するを忘るべからず。

◎底値の起上り

底値より起き上る相場を買入れて多少の利分付くと不討賣埋する事あり。是は甚だ悪しき仕方なり、決して急ぎ賣るものに不非。元来底を買出す時は二返三返掛

らざる前には決して賣埋せざる決べを要す。底の買上は充分買募るとのとべ得らるべし。

◎高下の狂ひに迷ふ勿れ

天底確定せば買方れば買気を貫き賣なれば賣気を一貫し次して中間の狂ひ高下に惑ふ可からず。堅く最初の立場を守り指定目標に接近する迄辛抱すべし。

◎大下鞘の米

紅甫意外の下鞘に生れたる時は陰分の米にても直ちに賣るべからず。一度は例ね返しあるべきを以て也。尤も秘法の安値指定と考合して動引すべし。

◎大上鞘の米

新甫意外の上鞘に生れし時は陽分の米にても直ちに買ふ可からず。一度は押し値あるべきを以てなり。尤も秘法の指定目標値と考合すべし。而して永く安値に保合米が新甫にて大上鞘を付け保合圏に上抜き生れたる時は発会保合分岐となりて暴騰するものと心得らるべし。

◎大風の害

大風吹きたれば二三日の役に被害現はるものなり。べ得らるべし。

◎不時氣候

不時風雨等気に梅へ相場の大体觀を変ずべからず。

◎陽分の相場（米）

底値より起上りし陽分の相場は月初めに安値に保合ふとも月末高きものと知るべし。

◎買悪しき相場

相場大底入れ間際は日増に低落し来り然も人心も弱く世人全体弱気となり先限も下鞘に廻る有様にて此の人気にては尚何程まで低落するか計り難しと一般に賣り気盛にて仲々買悪しきものなり。此の場合に於て秘法の

底値指定を熟べに精査して信念を堅め水火に飛込むが如き決べを以て買付けすべし　必ず勝利を得べし。

◎秋の甲子

秋の甲子天候不良雨天なれば秋場け悪しく米価は騰貴するを以て油断なく買狙心べし。

◎庚戌より乙乗迄

庚戌より乙乗迄の相場は保合か事あり、保合むたる時は秋法と照合して庚戌と乙乗の高値又は安値を抜き方に付くべし。庚戌乙乗は天底変化をなす事あり。庚戌にて保合分れとなり乙乗にて一時の天底をなす事あり。此の期間は秋法に引合せ駈引せば大いに得る処あり。

◎別れ日

甲子、癸巳、乙亥、壬辰、庚戌、乙丑

◎天底日

旧暦の九日、十七日、廿五日は其月の天底をなす事多し。測定法と照合して極めて注意すべし。休日に当り時は翌日に応用すべし。

◎毎年二回の大勝法

春秋彼岸の値中を投きし方へ付くべし。

◎包足の注意

天井又は底値指定値及半値附近にて包足出来たる時は翌日相場に向つて勝利なり。

◎上半期の大体観（米相場）

一月より六月迄は豊凶相場の後を受ける相場なる故高値中は概して少なし。財界金融養蚕麦作等の材料に依て波瀾を描くべし。

◎下半期の大体観（米相場）

七月より天災期及収穫期の波瀾時代なり。財界と天候の如何に依り端倪すべからざるものあり。此の期間

は上用崩れ旱魃風水害虫害旱冷鍬入不足其他の悲觀材料を唱ふるが年々の例にて、賣方恐怖的の奔騰を演ずる多き故兎角買方に廻るべし勝利なり。

◉天底月

十月天井の米は三五月底入となり、三月底入の米は五六月下押して七八月又は十月天井となる。七八月天井打ち米は十月又は十二月底入となり春は兎角安値に保合勝にて六月より上進す。八九月底入の米は十月又は十二月天井となる。五六月安値に保合ひし米は十、十一月天井となる十二月一月天井の米は三月又は六七月底入となる。

◉天井打ち及底入を知る法

数月上進して新高値に爆進した相場ゞ峻然其高値より五分以上反落して大引せし時又は其翌日に渡り六七分反落せし時は天井打と知るべし。底入は此の反対現象。

◉定期と正米との鞘にて転換を知る法

期米と正米との鞘や拡大にて何月ゞ續き或時期に至り世人の気の付かぬ内に其鞘ゞ無鞘又は逆鞘になりたる時は相場の転換期と知るべし。

第廿六章　古歌十五首

高安の理は空理にて目に見えず
　影も形もなきものゞ体
理と非との中にこそ理外の理
　米の高下の源とし此
古米多く豊年と見る安米は知るべし
　から腹上りの年と
古米少く強変ゞ出で高米は
　から腹下りの年と知るべし

順乗の年は空腹上りなり秋名月に買の種まけ
変乗の年は空腹下りなり秋名月に賣の種まけ
下るべき米の盛りに上るなら徳の有る程徳乗に買へ
米崩れ買落城の飛下げは氣は弱くとも賣は禁制
米枯れに賣落城の飛上げは気は強くとも買は禁制
強変が現はれ出れば皆強気了簡なしに賣の種まけ
弱気世に露はれ出れば皆弱気何時にても買の種まけ
四季共に鞘変りには気を付けて高安共に米に従へ
三割の高下に向ふあきなはは
金の湧きでる泉とぞ知れ
一平もいらぬ時節を待つべよし
たゞせく故にあら日を踏む
万人ぞ呆れはてたる値ぞ出れば
高き安きの界なりけり

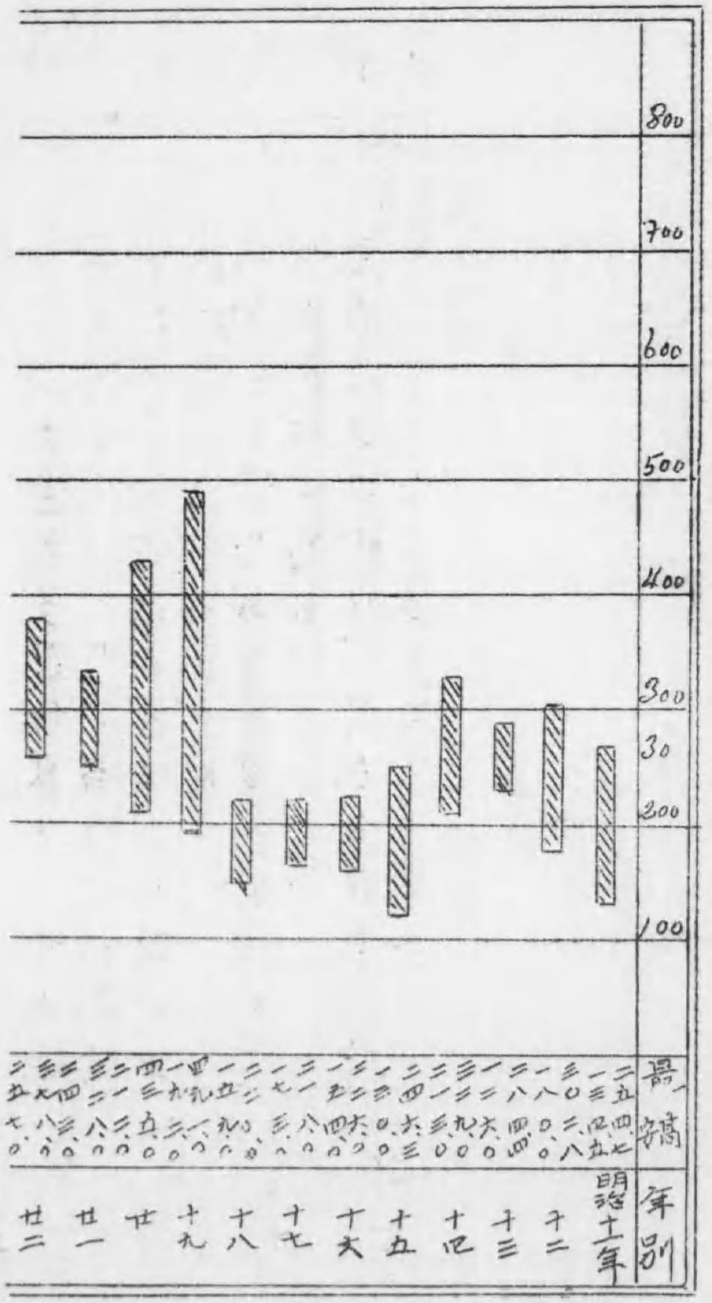
第廿六章　景気順環表

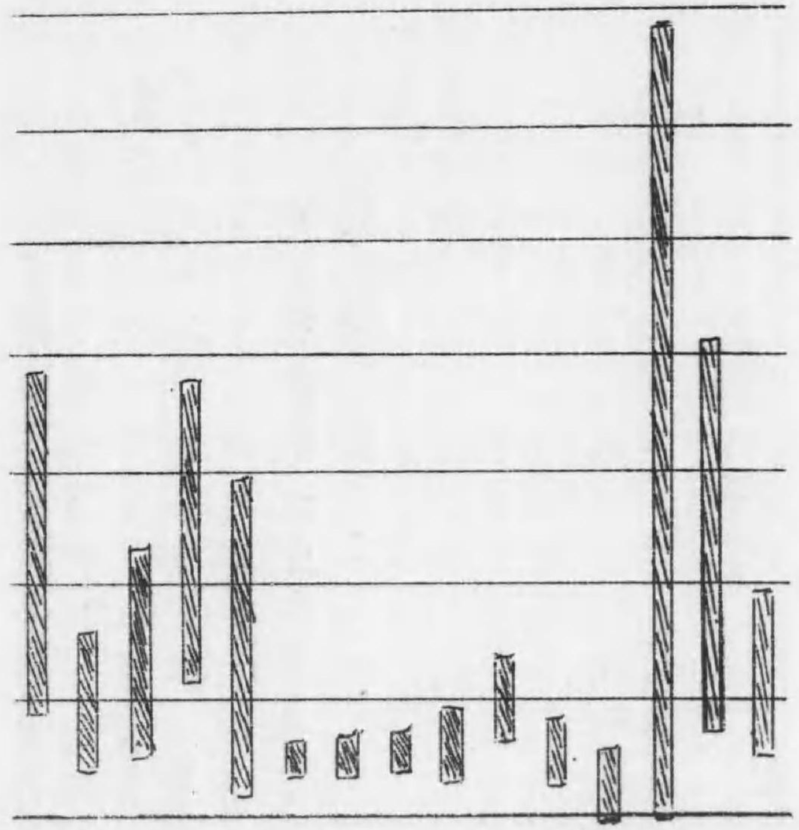
或人は左の如く指定せり。

努力	奮発	不景気に懲り不自由を忍び、生計の困難より脱出せんと大に努力す	元年（大正一年）十一年
時代	勤勉	眞面目に働けば少々にても利益あるを以て各人共に業を勵む。	二年 十二年
	節倹	汗を流し儲けし金を容易に散ぜず人々固く節倹を守る。	三年 十三年
	蓄積	塵も積れば山をなし銀行資金豊富となり輸出超過し正貨流入す	四年 十四年
好景気	豊満	資金充実金利低落有価証券暴騰事業勃興物価騰貴	五年 十五年
	驕慢	物価益々昇騰投機熱漸く盛奢侈心生ず。	六年 十六年

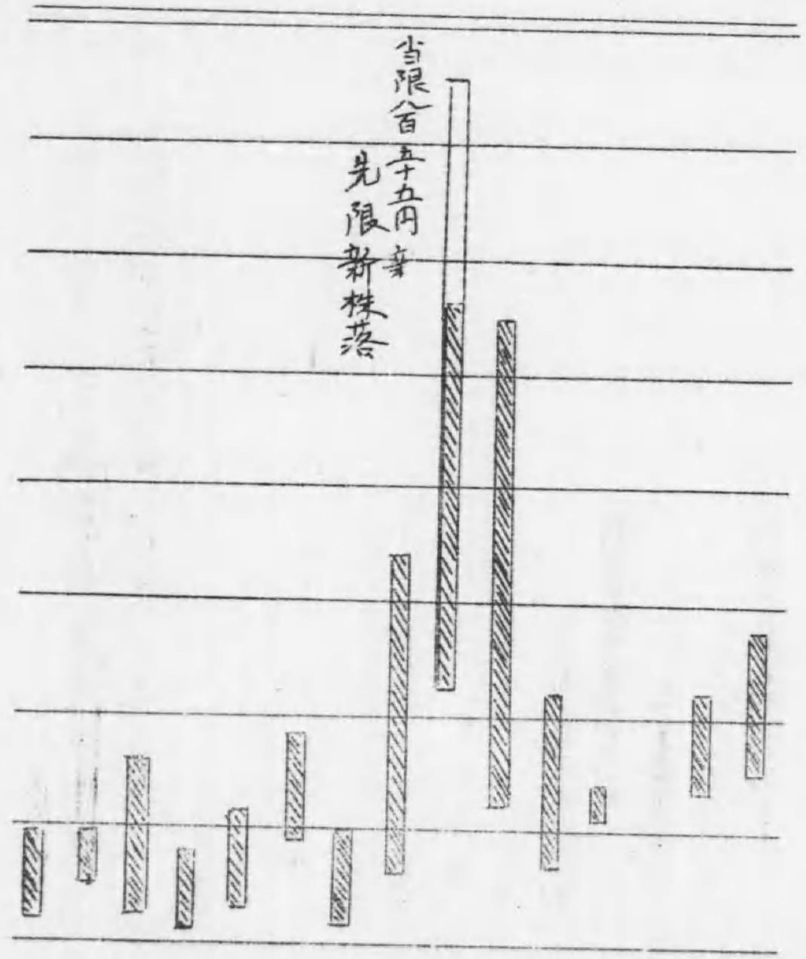
時代		
豪華	七年 十七年	投機盛生産過多奢侈募り、輸入超過正價流出資金需要激増金利暴騰
不景気時代 自暴	八年 十八年	貨物停滞物價底落奢侈改め難く生計困難遂に信用を濫用す。
変禍	九年 十九年	事業衰退資金減少百事不如意不景気の声漸く高し。
困窮	十年 廿年	実力なきは倒北、実力ある者亦縮少主義を取り自然陶汰の期至る。

第廿八章　東株創立以来年次高低表





廿三年	三六四〇〇	三六四〇〇
廿四	三〇三〇〇	三〇三〇〇
廿五	休止	
廿六	二五一〇〇	二五一〇〇
廿七	二五四〇〇	二五四〇〇
廿八	二五〇〇〇	二五〇〇〇
廿九	二六五〇〇	二六五〇〇
卅	三四〇〇〇	三四〇〇〇
卅一	一九九〇〇	一九九〇〇
卅二	一七四〇〇	一七四〇〇
卅三	一八〇〇〇	一八〇〇〇
卅四	二七七五〇	二七七五〇
卅五	二〇六〇〇	二〇六〇〇
卅六	二五八〇〇	二五八〇〇
卅七	二五九〇〇	二五九〇〇



卅八	二五一〇〇	二五一〇〇
卅九	二六五〇〇	二六五〇〇
卅	三四〇〇〇	三四〇〇〇
卅一	一九九〇〇	一九九〇〇
卅二	一七四〇〇	一七四〇〇
卅三	一八〇〇〇	一八〇〇〇
卅四	二七七五〇	二七七五〇
卅五	二〇六〇〇	二〇六〇〇
卅六	二五八〇〇	二五八〇〇
卅七	二五九〇〇	二五九〇〇
卅八	二六五〇〇	二六五〇〇
卅九	三四〇〇〇	三四〇〇〇
四十	一九九〇〇	一九九〇〇
四十一	一七四〇〇	一七四〇〇
四十二	一八〇〇〇	一八〇〇〇
四十三	二七七五〇	二七七五〇
四十四	二〇六〇〇	二〇六〇〇
四十五	二五八〇〇	二五八〇〇
四十六	二五九〇〇	二五九〇〇
四十七	二六五〇〇	二六五〇〇
四十八	三四〇〇〇	三四〇〇〇
四十九	一九九〇〇	一九九〇〇
五十	一七四〇〇	一七四〇〇
五十一	一八〇〇〇	一八〇〇〇
五十二	二七七五〇	二七七五〇
五十三	二〇六〇〇	二〇六〇〇
五十四	二五八〇〇	二五八〇〇
五十五	二五九〇〇	二五九〇〇
五十六	二六五〇〇	二六五〇〇
五十七	三四〇〇〇	三四〇〇〇
五十八	一九九〇〇	一九九〇〇
五十九	一七四〇〇	一七四〇〇
六十	一八〇〇〇	一八〇〇〇
六十一	二七七五〇	二七七五〇
六十二	二〇六〇〇	二〇六〇〇
六十三	二五八〇〇	二五八〇〇
六十四	二五九〇〇	二五九〇〇
六十五	二六五〇〇	二六五〇〇
六十六	三四〇〇〇	三四〇〇〇
六十七	一九九〇〇	一九九〇〇
六十八	一七四〇〇	一七四〇〇
六十九	一八〇〇〇	一八〇〇〇
七十	二七七五〇	二七七五〇
七十一	二〇六〇〇	二〇六〇〇
七十二	二五八〇〇	二五八〇〇
七十三	二五九〇〇	二五九〇〇
七十四	二六五〇〇	二六五〇〇
七十五	三四〇〇〇	三四〇〇〇
七十六	一九九〇〇	一九九〇〇
七十七	一七四〇〇	一七四〇〇
七十八	一八〇〇〇	一八〇〇〇
七十九	二七七五〇	二七七五〇
八十	二〇六〇〇	二〇六〇〇
八十一	二五八〇〇	二五八〇〇
八十二	二五九〇〇	二五九〇〇
八十三	二六五〇〇	二六五〇〇
八十四	三四〇〇〇	三四〇〇〇
八十五	一九九〇〇	一九九〇〇
八十六	一七四〇〇	一七四〇〇
八十七	一八〇〇〇	一八〇〇〇
八十八	二七七五〇	二七七五〇
八十九	二〇六〇〇	二〇六〇〇
九十	二五八〇〇	二五八〇〇
九十一	二五九〇〇	二五九〇〇
九十二	二六五〇〇	二六五〇〇
九十三	三四〇〇〇	三四〇〇〇
九十四	一九九〇〇	一九九〇〇
九十五	一七四〇〇	一七四〇〇
九十六	一八〇〇〇	一八〇〇〇
九十七	二七七五〇	二七七五〇
九十八	二〇六〇〇	二〇六〇〇
九十九	二五八〇〇	二五八〇〇
百	二五九〇〇	二五九〇〇

九	五四
十	九九
十一	一〇〇
十二	一〇九
十三	一〇七
十四	一〇〇
十五	九五
十六	九〇
十七	八三
十八	八〇
十九	七九
廿	七〇
廿一	六八
廿二	六〇
廿三	五八
廿四	五〇

第廿九章　投資の研究

千円の紙幣は何年経つても千円の價値しかないのである。千円丈の物品しか買へぬが、物價は歳を重ねるに従つて高くなるべし。ありに拾年前千円にて百反買へた反物が今日では五十反しか買へなくなりし如く、今後も拾年の後には、十反しか買へぬ様に変遷を来す事ならむ。あるひは二十五反しか買へぬ様に変物價は年と共に高くなり、貨幣は其反対に下落する云ふ現象は何処の國でも経済学者が肯定する処なり。茲に於て投資の方法を研究せねばならぬ。千円の金を利殖する為に如何なる方法を撰ぶべきか？　地所・預金・貸金・公債・株式

富致と貧乏の分れ目は此の一分の差の着目点による。

複利表

	四分八厘	六分	七分	八分	九分	一割
元金	一、〇〇〇円	一、〇〇〇円	一、〇〇〇円	一、〇〇〇円	一、〇〇〇円	一、〇〇〇円
五年目	一、二六四	一、三三六	一、四〇二	一、四五九	一、五三八	一、六二五
十年目	一、五九八	一、七九〇	一、九六七	二、一五六	二、三七四	二、六一七
廿年目	二、五五四	三、三九九	三、八七九	四、六七一	五、六二一	六、七八七
卅年目	四、〇八二	六、〇八七	七、六一三	一〇、〇六二	一三、三〇八	一七、六〇四

投資には二種あり。預金貸金の如き元本の変らぬものと土地家屋株式等の変動を来すものとなり。現今の如く物價の騰貴する時代には元本び物價騰貴率以上に騰貴する投資物を撰ばねばならぬ。郵便貯金・銀行預金等の五分や六分の利子で満足して居る者は唯に堅い考へだけで、頭を働かせて利殖を計るを知らぬと云ふ事なり。五分や六分の利殖にては物價高貴率に対照して資産が増加致さぬのみならず、減少する事になる。故に物價騰貴率より勝る利殖法を実行せねばならぬ。東京市内及び発展地の土地は十年に三倍以上の騰貴をなす。先ず年二割の騰貴率とみなし而して地所より揚る利益は三分ぐらいなり。

某人が世所や家作が高くなりしを幸に賣り掛けて銀行へ年七分の定期預金にして、其利で生活する計算で実行せり。真に安楽で羨しき話である。さて一面より考ふると、此人は年利概算一割六分位ゾヽ資産の増加率を損しておるのである。更に今後物價騰貴で七分の利子では生活困難となりて、元金を切り崩す事とならん。

第一利殖の方法も種々あるが堅実なる株式に投資する
全に利殖好利殖法なり。少し頭を働かして考ふへれば安
株に投資する法が直ちに解り実行も容易なるべし。
却は利廻は多少悪くとも固定資産の消
の見込よい分にし、社内保留積立金多く配当が確実で事業
充分に将来増資を属望せらるゝ会社を撰び又重役
の手腕信用如何も考慮して投資すべきものなり。
拾年以上堅実に経営し来りし会社の株はよいが好景
気時代になると株式熱盛になり地所熱も興るので各地
に新設会社が雨後の筍の如く創立せられ、
醸当確実と云ふ十三割の利益は見込まれると云フレミヤ
ム(権利)何円だと云ふ、景気を煽り宣傳する故其株をもち
たくなるが景気時代に新設会社の株を持つは免角
損失の基因となる。
利廻り好景気時代に於て持つべからず。
採算法を以て
の一部

配当を買値で割ると利廻が出る。
配当と利益とを加へ、買値で割ると利廻が出る。
儲けた額を買値で割ると利廻が出る。

第廿壱章　投資の秘訣

第廿七章景氣順逆表に示す通り、努力時代の後半期
(大正十三四年又は十五年の好景気時代の初め或は安
くなつた時)に堅実なる株を買おき、好景気時代の熱狂
相場の時に賣れば、年年配当を取つた其上に株價の騰
貴で大なる利益を得るは必定なり。
而して其金は堅実なる銀行へ一まづ預金し置き、株
が底値近くに暴落した時に又買つて暴騰を待つて賣る
事を繰返すが安全利殖の秘訣なり。
一例をあぐれば大正十四年三月に東株百二十円で拾

寸尺　ろ化帰　す　　すし動さ下小
して徒　ち　　て　　て　　て

かるべし。必ず忽せにす可からず、熱心に研究して陶朱猗頓の富を得ん事を望む。

期米大局測定足　分讓料五圓

新東長期大局測定足　分讓料五圓

新東短期大局測定足　分讓料參圓

新鐘大局測定足　分讓料參圓

新大株測定大局足　分讓料參円

以上は何れも前途の測定上必要の基点より作製し測定法の一切を加へしものなれば秘法の妙理を悟得する捷経なり。但し測定せざる足は半額にて一般の注文に応ずるも、測定足は秘法書を分譲せられし者以外には御断り。

"90"

新東短期方針大機號　分譲料 参円

当面の相場を予測し高下変化賣買の仕掛利喰の駆引を法示したる指導書なり。

期米　寶之泉　分譲料 五円

当面の相場を予測し高下変化其月の天底日及賣買の駆引を法示せる指導書なり。

通信規定

一、当社の指導通信希望者は米株綿絲生糸の区別を記し規定の料金を送れば通信を開始す。

一、通信は月何回と限らず一見了解し易き様高下波瀾値巾及仕掛利喰目標を記載し相場の起伏変動に応じて信書速達(地方は電報)を発し指導の完全を期す。

一、通信料　一種満廿日向　普通廿円特別廿円
　　短期廿円

東京下谷区初音町四ノ一六七
寶之座社
振替口座　東京六八二番
発電略号　(ホ)(ロ)

発行者　経済通信
印刷

大正拾五年四月三日
大正拾五年四月十日発行

不許複製
著作權所有

283
104

東京下谷区悠初音町四ノ六七
著作者 小澤節慥

終